

始めたる歟、いつ頃より始りたる歟詳ならず、古より禁裏の御門外に下馬札立る事無れば、國史舊記に下馬札の事みえず、青蓮院殿に世々下馬札の筆法を傳へられしとかや、みだりに書ば其所にわざわひありと云傳たる事も有にや、かの筆法は、いつ頃より何方に立し古法を傳られしやとらざる。

〔儀式〕踐祚大嘗祭儀上

自左衛門陣標後相去十許丈立大臣下馬標去之廿許丈立諸司下馬標二、左右各一丈、高三許尺、下同。自左衛門陣標右去四許丈立右兵衛留標右去四許丈立右衛門留標其後廿許丈立諸司下馬標。

〔平野行幸次第〕車駕著御社頭略○中

先是立下馬標

〔吾妻鏡二十一〕建曆三年五月二日壬寅筑後左衛門尉朝重在義盛之近隣而義盛館軍兵競集見其糝聞其音備戎服發使者告事之由於前大膳大夫略○中即匠作揚旗率勢警固中下馬橋給

〔吾妻鏡三十四〕仁治二年十一月二十九日壬子未剋若宮大路下下馬橋邊騷動是三浦一族與小山之輩有喧嘩兩方緣者馳集成群之故也前武州太令驚給即遣佐渡前司基綱平左衛門尉盛綱等令宥給之間靜謐云云略○下

〔吾妻鏡三十七〕寛元四年五月廿四日辛巳鎌倉中民不靜資財雜具運隱東西云云已被固辻々澀谷一族等左親衛請命警固中下馬橋而太宰少貳爲參御所欲融之處彼輩於參御所者不可聽之令參北條殿御方者稱不可及抑留之由此間頗有喧嘩彌物恐略○下

〔元德二年三月日吉社並叡山行幸記〕退凡下乘の靈山會をうつし七重結界し給へる峯にてもとより牛馬をもちゆるみちならねば公卿も歩行の儀にて侍けれどもおほさかに成ぬれば御こしをすめたてまつりてのちをのくたごしをもちひ給ふ。